

統語論—単語の二重分節を中心にして

青 山 文 啓

統語研究の二つの立場

小論では、統語論の中における単語の重要性に焦点を絞り、解説を試みる。文はことばの研究の中で最大の構造的な単位である。というのは、文の中には、その言語で見つかるすべての品詞情報を担った単語が現れうるからである。統語論は、この文を主な対象として、それを構成する要素間の配列および要素の持つ分布特性から、文の構成を論ずる。その場合、考察の基礎を単語に置くか、単語の集積としての句に置くかで、立場は、大きく二つに分かれる。⁽¹⁾句 (phrase) は構成要素 (constituent) とも呼ばれる。前者の立場は、デニエールに代表されるヨーロッパの依存文法 (dependency grammar)

に源流がある。後者の立場は、ブルームフィールドの構造言語学から現在の生成文法 (generative grammar) にいたるまでアメリカで主流を占めてきた考え方である。「統語論」は、国内の研究者の間で「構文論」「統辞論」とも呼ばれる。これら三つの用語の間には、「惑星」と「遊星」という用語の使われ方にも似て、研究者の出自や志向に応じて使い分けが見られる。「統語論」という用語は英語学の研究者の間で、「構文論」は国語学や工学を中心とする日本語研究者の間で、「統辞論」はフランス語やロシア語などを中心とする研究者の間で、それぞれ使用される傾向がある。ここで「統語論」の名称を採用するのは、以下に述べるように「単語」を統語研究の中心と見なしたいからである。⁽²⁾ちなみに、先に触れ

た「依存文法」の別称として「従属文法」がある。英語学で「従属節」(dependent/subordinate clause)の名称が、国語学で「従属句」の名称がそれぞれ確立されていることを考えれば、「従属文法」の訳語は一般化していないものの、根拠がないとはいえない。以下では、文の中における単語間の関係を述べる場合、従来から用いられてきた「修飾」(modification)を使用するが、注意を要するのは、「修飾」という用語が修飾句を強調するのに対して、「従属/依存」は被修飾語(主要部)の方を強調する点である。従って、「YはXを修飾する」は「YはXに従属/依存する」と同義的に言い換えられる。近年、後者の用語が好まれるのは、以下でも詳しく述べるように、被修飾語の重要性が改めて認識されているからである。統語論の中で重要な役割を果たす被修飾語は、小論であげるデータに関する限り、動詞に代表される用言か名詞に代表される体言か、二つに一つである。単語間の修飾関係について触れる前に、三つの領域に分けて問題を整理しておきたい。一つは、文を考察の対象にする場合、一般に、統語論、意味論、運用論の三つの観点から論じられることが多いが、それぞれの関係に

ついて触れる必要がある。二つ目に考えたいのは、単語を構成する音声と、単語によって構成される文の、三者間の関係についてである。文を構成する単語間の関係は、単語の属する品詞に立脚して論じられるので、三つ目に、単語の担う品詞情報について考察しながら、最初にあげた三つの観点を振り返ることにする。

統語論、意味論、運用論

統語論(syntax)が形式面から文の性格を考察するのに対して、意味論(semantics)は内容面から文を考察する。統語論と意味論の二分が文という表現形式の範囲内に留まるのに対して、運用論(pragmatics)では、ある文が発話される場面に考察の焦点を合わせる(この分野は英語学の研究者の間では「語用論」と呼ばれる場合が多い)。つまり、同じ文が使用される場面ごとに、どのような幅を持って理解されうるかに考察の主眼が置かれる。例えば、ある女性が帰宅した子供に向かって「テーブルの上にイチゴがあるわよ」といえば、「イチゴを食べなさい」という提案として普通は理解される。これに対して、同じ女性がこの文を高級レストランで客と

して、自分の招かれたテーブルに目をやりながらウエーターに向かっていう場面では、それは「早くイチゴをかたづけて」という叱責と受けとられる可能性が高い。³⁾

ちなみに、日本語の敬語の問題は、「手紙を読む」から謙讓表現「(話し手が)お手紙を読ませていただく」や、尊敬表現「(話し手以外の人が)お手紙をお読みになる」がそれぞれできあがるように、単語間の選択はもちろんのこと統語論にも関係する。それと同時に、これらの使い分けは意味論で扱われるより、運用論の分野で扱われるべき話題を多く含む。例えば、「いま三時だよ」と「ただいま三時でございます」との二つの表現では、意味論で扱われるはずの命題部分に何の変更も見られないからである。

このように研究領域を統語論、意味論、運用論に三分することは、パース、モリス、カルナップなど、言語を信号体系一般の中で論じようとした記号論研究の先駆者によって行なわれた区別である。しかし、統語論および意味論から運用論を区別するのは、ソシユールのラング／パロール、チョムスキーの能力／運用の区別に通じるものである(ただし、ソシユールは文をパロールの単位

と考えた点で、チョムスキーとは異なる⁴⁾。

ところで、一方の意味論が主に平叙文の命題部分を扱うのに対して、運用論はそこから命題を除いた叙法部分を主な対象にする。また、運用論では、平叙文だけでなく、質問文、命令文、感嘆文、さらに統語論や意味論で通例は不問に付される、挨拶表現、受け答え、言い誤りや修正等を含めた不完全文や、沈黙の使用までもが考察の対象にされる。さらに多言語社会の日常まで考慮すれば、一文の内と外とで別々の言語が混在するコード・スイッチング(code-switching)まで射程に収める必要がある。この意味で、意味論と運用論は、それぞれの扱う対象領域を補い合っていて、切り離すことのできない統一体の二つの側面であり、この分割を否定する研究者も少なくない。また、意味論と運用論の区別は一面で、辞典(dictionary)と百科事典(encyclopedia)の区別に並行するところがあるが、両者の連続する関係についても後で触れることにする。

単語と二重分節

ヒトの使う言語には平均二〇から三〇の音声レパートリーがあるといわれる。私たちの母語である日本語（その標準語である東京方言）は、五つの母音と一九の子音を音素レベルで区別する。⁽⁵⁾これは世界中に五〇〇〇から七〇〇〇ほど存在するといわれる個別言語の平均的な音声レパートリーにちょうど収まる数である。一方、ベルベット・モンキーは三十六種の音声を持つといわれるが、⁽⁶⁾音声を配列してそれより上の単位である単語を形成することはない。このことは、彼らが同種間でやりとりできるメッセージの上限が音声の数に限られることを意味する。

これに対して、配列はヒトの言語を他の動物の伝達システムから区別する一大特徴である。音声レパートリーの平均値は二〇から三〇に過ぎないが、成人の頭の中には、それを配列して形成された万単位の単語が記憶されている。とすれば、私たちのことばの知識は個々の単語を基体とし、他の単語との配列にあたって参照される、語形成、活用、修飾などに関する情報は、その単語を検

索用の窓口とする形で記憶の中に格納されているはずである（このように考えれば、以前に触れたソシュールとチョムスキーの相違は中和されてしまうことに注意）。

ここでは、このような前提に立ち、単語を中心として、それを構成する単位である音声とそれから構成される単位である文とを区別して、ヒトの言語は二重性（duality）がある、あるいは二重分節（double articulation）される、という。前者はホケットの、後者はマルティネの使用する用語である。⁽⁷⁾ある個人の使用語彙がその理解語彙の部分集合に過ぎないことは以前から知られている。また、私たちの記憶できる単語に限りがあり個人によって偏差がある一方で、その総体が一生を通じて不変ということもありえない。このことは、外来語の流入あるいは新語や専門語の形成を見ても分かるように、個別言語のレベルにおいても単語の総量が単純には捉えがたい実体であり、その言語を取り巻く外的条件によって単語の総体に大きな偏差が生まれることを物語っている。

しかしながら、単語が音声の配列によって形成されることと、単語を配列して文を形成することの間には大きな違いがある。前者の特徴は恣意性（arbitrariness）

と呼ばれる。というのは、単語を構成する音声はその言語の持つ音節構造の制約の範囲内で配列されるが、音声の配列が何らかの意味に対応するという形でそれを定式化することはできないからである。(逆に、こうした恣意性があるからこそ、個人あるいは一言語における単語のメンバーシップに解放性があたえられ、上に述べた外来語の流入や専門語の形成が自由に行なわれるようになる。⁽⁸⁾さらに重要なことは、こうした単語の大半が複合名詞あるいは固有名詞であるという事実である。)

例えば、日本語で god: 「サイ」と、末尾音 -i: を固定してその前を入れ換えた god: 「葦」との間、また英語で dog: 「イヌ」と、中央の音 o: を軸にしてその前後を入れ換えた god: 「神」との間に、有契的な、つまり恣意的でない対応を見出すことはむずかしい。ところが後者の、文における単語の配列では、日本語の「太郎は花子が好きだ」に上と同様の操作を加えた「花子は太郎が好きだ」、あるいは英語の「John loves Mary」に同様の操作を加えた「Mary loves John」の場合のように、それぞれの対に見られる類似と相違は単語の配列の問題に帰着させることができる。ここから統語論の領域が始まるが、

そこで私たちに課された仕事は、音声配列が統語情報と出会う、単語という不可思議な実体の間に見られる規則性を追い求めることである。

品詞―辞典と百科事典を例に

品詞情報を含む単語の性格づけが必要となるのは、上に見たような、文の中における単語間の配列を定式化するためである。品詞を語るのに都合のよい出発点は、辞典と百科事典に見られる見出し語の違いである。辞典には、その言語で見つかるすべての品詞が見出し語として登録される。ただし、辞典本来の目的は、単語の持つ、語形成、活用、修飾などの情報を示すことにあるので、見出し語として優先的に登録されるのは単純語であり、複合名詞や固有名詞が見出し語にされることは少ない。一方、百科事典に登録されるのは名詞のうち固有名詞と普通名詞に限られる。つまり、辞典とは逆に、百科事典で優先的に見出し語に登録されるのは複合語の方である。理想的には、辞典にはある見出し語が他の見出し語との間に有する用法が記載され、百科事典には見出し語の持つ概念について記載されると考えられる。しかし、も

ともと名詞の数は、どの言語でも他の品詞を圧倒して無限ともいえるほど多い。このため、辞典には収まりきらず別に百科事典が必要とされるという見方も可能である。実際、各種の専門用語および現代用語事典は、百科事典から分派したものである。⁽⁹⁾

連用と連体

日本語では、書きことばにおける完全文に焦点を合わせる限り、文はすべて用言（動詞、形容詞、助動詞）で終わる。ここで用言の中に「形容動詞」を含めないのは、次のような理由からである。日本の国語辞典の大半は、名詞に後続する助動詞のダ「学生／ダ」と、形容動詞の末尾要素であるはずのダ「好き／ダ」とを同一物と見なして、形容動詞については語幹だけを見出し語とする。このような見出し語の立て方は、形容動詞を自動的に無活用と見なすことになる。形容動詞を用言の一つと認めないのはこのためである。

いづれにしても、実際のテキストに現れる文の中では、見出し語として最も数の多い名詞を含む体言では使用頻度が分散する傾向が見られるのに対して、逆に数の少な

い動詞や助動詞などの用言に使用頻度は集中する。結局、文の構造は、「太郎と花子」などの並列構造を除けば、用言を修飾するか体言を修飾するか、つまり連用か連体かの二つに一つであり、その繰り返しとして記述できる。（両者をそれぞれ、イエスペルセンは述定 (nexus) および装定 (junction) と呼んだ。現在でもこの区別は受け継がれているが、彼の使った用語およびその訳語は使用されなくなっている⁽¹⁰⁾）。

例えば、「彼女は中国語の勉強をしている」「彼女は水玉のスカーフをしている」「彼女はシリア人の顔をしている」「彼女は小学校の教師をしている」において、動詞「する」は、体言を連用修飾として主語と目的語に取る。そして、その目的語の内部には連体修飾が現われることから、四例とも同一の構文にまとめられるように見える。⁽¹¹⁾しかし、文の中で述語として使われる動詞や形容詞は、平板な形で体言を配列して自分自身に修飾させるわけではなく、修飾には階層関係が見られる。特に「する」のように使用頻度の高い用言ほど、最も深い階層にある連用修飾（上の例では、目的語）を参照して初めて用法が判明する。例えば、四例中、二番目の「スカ

「フをしている」の場合に限り「する」は「巻く」と同義的であり、着脱動詞として使われている。しかし、この便宜的な名称は、その目的語に「着脱物」を表わす名詞が来ることの簡略的な表現に過ぎない。つまり、高頻度の動詞ほど、用法の解明は名詞の、そこからさらに踏み込んだ性格づけに依存することが分かる。⁽¹²⁾

もう一つ同様の例をあげる。三番目にあげた「顔」という身体部位を表わす名詞を目的語に取る例は、四例中最も「他動詞」らしくない、と感じられる。この内省は、連体修飾「シシリア人の」が省略できないこと、それと連動して、「している」を「する」で置き換えられないことから傍証が得られる。さらに、この目的語を被修飾語にした「彼女がしているシシリア人の顔」は、「シシリア人」のような属性名詞が修飾句である限りは不可能である。すでに述べたように、動詞「する」を目的語として連用修飾する名詞「顔」に何らかの連体修飾が必要か否かは、この動詞が身体部位を表わす名詞を目的語に取った場合の一般化に過ぎない。というのは、「顔を洗う」のように同じ名詞が別の動詞の目的語に来た場合は連体修飾を必要としないし、上にあげた他の三例の場合

も同じだからである。しかし、これらのデータから、身体部位を表わす名詞が目的語として「する」を連用修飾する場合、この種の名詞にとって連体修飾が必須であるという指示は「する」自身から出されると考えることは充分可能である(恐らく、このような考え方は、私たちの頭の中に格納された辞書(lexicon)モデルに非常に近いものである)。そして、このようなデータが一例でも存在することから、統語論は、連用が連体より優先順位の高い修飾情報であることを一般論として提示することができる。

重要なことは、これまで述べてきたように、統語論においても単語は無視できない実体であるという認識であり、品詞情報のみに主として頼る構文記述からは充分な一般性が得られないという教訓である。このことは一つの言語において最大のメンバーを誇り、一方で日々生産され、他方で忘れ去られてゆく名詞の場合は、特に深刻な問題を提示する。

もう一つ別の例をあげよう。日本最大の見出し語を誇る『日本国語大辞典』(小学館)には四四万に及ぶ単語が収録されているが、七三・一九%が名詞だとい⁽¹³⁾う。

(しかも、そこには固有名詞も形容動詞語幹も代名詞も含まれていない。主要品詞の内訳は、動詞五・七二%、代名詞〇・一六%、形容詞一・〇〇%、形容動詞一・〇九%、副詞一・二五%である。) この数字からすれば、品詞論のゴミ箱は通説化した副詞ではなく名詞の方であり、ある単語を「名詞」と表示することは、それほど多くを語ることにほならない。統語論において有意義な一般化になかなか到達できないのは、大量に存在し、周辺部では雑多な性格を見せる名詞のせいではないか。話題を安定部の名詞に限ったとしても、品詞表示以上の情報をどのような形で手に入れ、それを提示するかは、辞書中心の統語論が早急に解決すべき課題といえるだろう。

むすび

構造主義から生成文法にいたる一つの特徴は、共時/通時、ラング/パロール、能力/運用、深層/表層などの二分法を多用して他方を切り捨て、研究対象としてのことばを単純化して見せることにあった。以前から行なわれていた文法/辞書の二分はこうした文脈の中で再解釈され、辞書つまり単語は切り捨てられ、文法だけが自

立して研究されるかのような印象を与えてきた。生成文法の登場から四〇年以上経過した今、私たちが立っている地点から望んでいるのは、少なくとも統語論に関する限り、辞書と文法が連綿と続く段々畑のような景観といえるのかもしれない。

* 本稿はもともと、別の目的でまとめた草稿に、改訂を加えたものである。多少なりとも役立つ情報が含まれているとすれば、南不二男先生と高橋昭氏に負うところが大きい。また、掲載にあたって中島由美氏のお世話になったことを申し添えて感謝にかえたい。

(1) 依存文法と句構造文法の対比については、次に掲げる著書(四章)を参照。

Mathews, P. H. (1981) *Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.

(2) 次の邦訳書に見える「統語論」の訳語は、最も早い時期に属するものと思われる。

Bloomfield, L. (1933) *Language*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 『言語』三宅鴻/日野資純訳、大修館、一九六二

(3) 以下の著書(二三二—二三九頁)にあげられた例に多少の変更を加えて示す。

Hurlford, J. R. & Heasley, B. (1983) *Semantics: A Course-book*. Cambridge: Cambridge University Press.

- (4) この点に関連するシニールの考えは以下に引用するとおりである。

「言語は、各人の脳裡に貯蔵された印刻の総和の形をなして、集団のうちに存在する。そのさまは、同じ辞書を各人が一部ずつ所有するのに似づらる」(*Cours de linguistique générale*. Paris: Payot, 1916. 『一般言語学講義』小林英夫訳、岩波書店、初版一九四〇、改訂版一九七二、二三頁)

- (5) 次に掲げる論考の記述による。

城生伯太郎(一九七七) 現代日本語の音韻、『岩波講座日本語五・音韻』大野晋／柴田武編、岩波書店、一〇七一―一四五頁

- (6) この記述は次の著書(三章)によるが、そこには嘔吐やクシャミなどの生理音が含まれるとらう。

Yule, G. (1987) *The Study of Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (『現代言語学二〇章』今井邦彦／中島平三訳、大修館、一九九二)

- (7) 次にあげる、ホケット(六四章)「マルティネ(一章)を参照。チェイフ(三章)には両方の用語が紹介されている。

Hockett, C. F. (1958) *A Course in Modern Linguistics*. New York: Macmillan.
Martinet, A. (1965) *La linguistique synchronique*. Paris:

Presses Universitaires de France. (『共時言語学』渡瀬嘉朗訳、白水社、一九七七)

Chafe, W. L. (1970) *Meaning and the Structure of Language*. Chicago: University of Chicago Press. (『意味と言語構造』青木晴夫訳、大修館、一九七四)

- (8) この点について、次の著書(例えば六章)から得られる情報は質と量、ともに圧倒的である。

Coulmas, F. (1992) *Die Wirtschaft mit der Sprache*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (『いとは経済学』諏訪功ほか訳、大修館、一九九三)

- (9) 辞典の類型については次の著書(二〇章)に詳しい。
坂本英子／鈴木重幸／鈴木康之／高木一彦／宮島達夫(一九六四)『語彙教育』むぎ書房

- (10) 欧米の主要言語が連用と連体の区別に日本語ほど熱心でない点、およびこれらの訳語の来歴については、次にあげる拙論をそれぞれ参照。

青山文啓(二〇〇〇a) 活用と統語——日本語とスペイン語との比較から、『日本語と外国語との対照研究VI: 日本語とスペイン語(三)』くろしお出版、三九―六六頁
青山文啓(二〇〇〇b) 日本語の主語をめぐる問題、『日本語学』一九(五)、八八―九九頁

- (11) 同様の例を扱った次の拙論も参照。

青山文啓(一九九八) 二重主語構文と辞書、『言語』二七(三)、五七―六三頁

- (12) この問題に関連して最も重要な論考は、次に掲げるも

のである。

宮島達夫(一九九六) カテゴリー的多義性、『日本語文法の諸問題』鈴木泰/角田太作編、ひつじ書房、二九―五二頁

(13) このデータは、次に掲げる有益な資料集(七三頁)に

要約された松田栄一氏の論考(一九七九)による。

林大監修、宮島達夫/野村雅昭/江川清/中野洋/真田信治/佐竹秀雄編(一九八二)『図説日本語』角川書店

(桜美林大学助教授)